

國立臺灣大學圖書館  
N221780

門
類
所 集 列
類
冊 序
(編次與書名)

欽定四庫全書  
詩經

南山經  
卷之四

A 00  
酒 竹  
1344



十方庵師遠芳忌

追善  
殘菊集

西肥

再庵遊孚坊  
隣山居李侄編



西 1344

酒々文庫

追福

尊十方庵の主人を師坊以  
一終のて後焉我の鬼走う  
嘉永五此より時而丹初の  
五といや十三回忌展と年  
ありてはうー其の老健ハ多ハ  
段一々若きふ愛れとより年  
不易ふりつれ下高西ををれ



詞友平歌ある隣山居いふあり  
れぬそふれは庭との（終日五十  
朝を次ふの）一考一書と  
さけそくつ世をとり  
介と慍む頼春寺よりやうそ  
り歌

松亭坊

世よりふ山歌り新ら葉の目  
いふ——仲れと冬折ぬ君  
李俊

梅の盡し流すて髪の色もはく  
氣うちもせれ中よとてあり  
佳逸  
池の面剣も、龍の浪も、セ  
茶友  
原く校のともあつこのや  
桂夕  
そ海の新ふ大工の藝やう以  
僑泉  
はりしれん、の、は、深川安  
旭子  
世よりふふ素ふまゝ、世知と恭  
文貞  
ふふ——通る本着れ先船  
以作

喉川へも蒼り打入て時急あふ  
 天時斗あふきハせぬそに  
 諸合此刺名の上ふ川りきと  
 出私り丁衣あふる月り  
 あふるを目り通ふそ急の時  
 りやり撲るるゆり乙子の  
 信ふハ言ぬ内うり月うさし  
 玄日の隠居の隠り世まも  
 透翅 霍若仙

獅垂小獅うな利の苞ユの  
 星うりきやう  
 ま川花の咲く時や西東  
 柳のしれともそりり  
 報々六若殿系れと練り  
 ほんさう孫を抱く森決り  
 岩帳も大意大熱れ所年暮  
 強の中も穢な古縁り  
 兼路 和来 花狂 指井 芦花 井呂 一以 文芸

筑紫路り燈籠とくすゝみ

文鳳

杓子初穂を陰籠り盡る

双友

菽越の朝日さくはく今も一昨

耕玄

ふとくしやれう直はく

李朝

張るもをともぬと賽の売ぬけを

阿月

抱瘡此仙の男きくく

如爪

々々境に郡境やふふさか

古泉

少川でくくと不堅此音

文佐

月小やうるうとくれふははく

市浦

お抱くお撲場をやうふ新

月笑

梯はあハ西の北皮の皮角とやと

青字

幾人か少川の夜聲をきき

婆柳

女房うはのやふのくきねあ

宇律

塩茶ふとえて餅う餅く

荷香

わううの能くあうううううう

荷雲

ま華とくくくくくく

波徊

竹之此折り 袴より 二 瀬  
 忘れぬ此月より 二 瀬  
 木の根のより 二 瀬  
 家より 二 瀬  
 青木より 二 瀬  
 水のより 二 瀬  
 ちよひより 二 瀬  
 作より 二 瀬

右五十新

右五十新

見せたりや 二 瀬  
 牙より 二 瀬  
 水より 二 瀬  
 今ハ海より 二 瀬  
 中より 二 瀬

免くさ日や合入るすれそあのみ向 保水連 和未  
 寂しこれたのみ向や枇杷のみ向 指井  
 松るすや傳書し夜佐のへへ 指山  
 重きやるの細とのみ向き 文山  
 手向も云のまふまやあふり 花香  
 洞あのみ向や破のみ向水 昇山  
 手向うや及小柳のぬ水き 旭子  
 けしきと観てすや小夜時雨 鹿雪

今ふ名ハ消れとすの言ふもて 同松主 芦臺  
 煙くくす若葉喧れ名思 教之  
 今ハれつし思れり 文徳  
 日短やせえてハ思の通あふん 恕川  
 十方ふ名のと猶うて雪 佛  
 其佐の書新や松の時雨とも 螺山  
 身又思のまゝく煙くけ氏年思 霍右仙  
 思ハを山橋のゆき枝も向てや 小豆連 以

師の思や十五をいふは手向も  
 口切てくゝの手向ふ茶のむ香  
 手向の灯細りて通ぬま香  
 住度一そも時向く思の思日  
 寂ぬの魂り手向ん枕杞のそま  
 原ま思ま持くや寂ぬの落少  
 むのこ師の徳も新し雨思  
 徳とれ一そ向や持く縁  
 文風 双友 宇伴 文墨 希甫 佳逸 評雨 礎友

原の思り十五手向ん處の持  
 無唱てある十五手向のを思  
 後む寂ぬやあつれを養ふま香  
 師の思やいふそも身の悴  
 十方小今も其れや香  
 思ひ出まよ五七一時のそ養う  
 左一世の思ふも一そ向く月  
 師の法延り思ふの上をと悟徒て連  
 縁一そま少を  
 以牛 可柳 姿柳 稀友 花狂 西川 二稠  
 香ま望 麻理進 法寺 吉田進



君のふりや焚れまゝもろゝ  
 月雪りえぬおもく戸の暮れ川  
 蔭の茶の花もあつとも月白人  
 今ハ昔師ぬむの月白とと  
 君り頼る月白忘れそむも  
 此れ出でハ清くあつとものおす味  
 初め枝も君の月白やうろく嘆  
 言ふ君の新しくや月の

花假坊  
 山形道  
 青宇  
 柳道  
 湖月  
 川道  
 古泉  
 大町  
 一嘴  
 耕玄

月一切の君小糸や新く日  
 其君り個ぬあつれの月白と  
 月白とや君のあつれ小夜ふも  
 君のふりや香もあつて神付の

李朝  
 李夕  
 柔路  
 又矣

又さー茶楼下初照転今小ま  
 まーやん先生の藤小入つ  
 中、初文より小操ね庵山小糸と  
 稀、終いー終まで三十三本  
 丁也小糸ー叔佐小逸されりハ  
 縁う浦傳人又和浦の方、松枝の

交毎小娘の姿を袖に抱きしめて  
——て又句の小娘にても交毎の  
糸を教へう——林海岳の意趣に  
いふ交毎の——一筆を括る  
や——

掛抄の既院小をうやうや  
と個ひ侍れい所 定尔よりて  
と括る五歌を

笑されて又よ山やもふも  
太馬の奇仙りと次交毎の  
うはう少や七十三軒の志平  
と撰の授け侍り——八時小をうや

師方の承列と自快防下れえ  
ふもよとの除積あんと八建佐の  
後小の合されて月やもむも  
淑とそと侍るぬや年八十三回忌  
尚らうのいふ小一む一燈を持  
流雅と括——真りの二をとも  
有るも九牛う二毛の謝意をもつ  
ありや——

免く歌小女常やも悲い意れ終る

陳山  
李俊

余真

穉友

打々やきふふの夕景を

寂しくみれば競うさうはふ

文真

賣買の双師ハ極まりのわ

花狂

右五十韻末略

久保

日のさくや木も起りや雪の影

透翹

いふよりて象跡れぬ

佳透

挑弓やあま僧のう

礎友

雪のうや接ふむ雪や来のも影

以叶

まきくくく接うけふも接やう

う柳

尼寺もあはれう世をれ破

姿柳

水待ていむ風呂れきさう

雨雨

沙汰る月やあふ海の下

穉友

雨戸も雪ふくれ川を流の歌

文墨

茶梅や接うを接の小難く

双友

梨枝へ何うまのそ——花うま  
玉垣のうちや新い松の花  
秋時雨保所や海士のうけ髪  
山——八木所——今の中  
雪片——雪うりりるの耳  
除くは春ふ木の葉の跡や初時雨  
春の影や眠のうらむ息 尾  
風呂吹やひひのけと拭て茶

文風 宇律 一得 桃音 沢井 園伝 侍松 一以

このうま味 君ふハきりし銀汁  
暖湯に冬く華うう入梅のこれ  
土代うや夏を新ふ簪頭てり  
花のとも春ううさふふ木の葉  
山寺や風うりる毎のうらむさ  
花小雲ううらむさふ枯れう雨  
放ううううううううううう  
けうう大のうう大勝——御座

序 花狂 旭子 庭雪 娛山 既之 芦童 在右仙

陶器焼く烟く小霧く下着系外 可涼

遙遠直悼

君の忌や十方堂より小妻如 六ヶ 冥潜

無唱た音くあややねを忌 平妻 黒水

乙一龍紫種田中の水

空の月ハあま川下飛入て子を成 老花 老師

昔

十方菴と云いあね茶坊小題に

又芳波極歴のねく予う茶坊

小もま修くさく小旧縁の悔く

きりし小あゝあひ龍世糸種四れ

板と云ふ初の四小くちりねり

修く子々のあひ茶坊莫士松子

群傍し叫み師君を報くて道

福の義をを伴く親く風をを

招きて名も同の吟とをい  
 極小ちこそめ世に披ふや  
 もの原ふあつても去年のや  
 陵山居のこゝ世と群一  
 中されーいゝ存子書然  
 是と愛ひ予小校合けりー  
 もの常小態ー々寸忘れ  
 形も字とまゝー丁太の集ふ

かふふ

えくて未く吊小妹孫下時の舟

其秋屋



蕉門書林

皇都寺剛通二條

橘屋治兵衛梓